埼玉県納税貯蓄組合総連合会優秀賞

「税金に守られているあたりまえの日常」

学校法人大妻学院　大妻嵐山中学校　二年　能見　菜月

「いったいなぁ。」

右足の太ももに痛みを感じ起き上がった私の目に荒れた部屋が映ったのは小学一年生の時だった。足の痛みは隣で寝ていた母が、父のさけび声に驚いて飛び起きた時に私の足をけったことで発生したらしい。父は真っ青な顔をして、沈んだ声で、

「どろぼうに入られた。」

そうつぶやいていた。私は、寝起きの頭でぼうっとしている中、何が起きたのか一つ一つ確認しながら、まさかそんなドラマみたいな事が起こるなんて…と思っていた。それからが忙しかった記憶がある。私が朝ごはんを食べている横で、警察の方が母の指紋をとっている。外に散らばった家のものを調べる人、父と話をしている人。異様な空気に包まれた家に見送られながら、私は学校へ歩いて行った。そのとき、どんな気分だったのか、今はどうしても思い出すことができない。しかし、きっと気が気ではなかっただろう。自分も不安なのを隠して、私を安心させるように無理に作ったであろう母のぎこちない笑顔だけが妙に印象的だった。その後、警察の方がパトロールをしてくれ、犯人も捕まえてくれた。警察の方がいるから私達の生活の安全は守られているのだと感じた。この事件を解決してくださったお礼として書いて送った手紙を警察の方が読んでくれたらしく、逆にお礼の電話がかかってきた。私は恥ずかしくて電話を代わることはできなかったけれど、後に母から聞いた話では、上の方の立場の人にまで私の手紙のことを伝えていて、お礼の電話が遅くなったのだと言う。そんなにたくさんの人に読まれていたと考えると、さらに恥ずかしさが上昇したが、同時に心がポカポカと暖まるのを感じたことを覚えている。

あの事件の記憶が少しずつ薄れはじめるほど年を重ね成長し、税金のことを知った今、初めて警察の方が税金によって働いていること知った。警察の方がいなければ、私達の町には犯罪者があふれ、犯罪が絶えず起こり、危険で外にも出られない生活をしているだろう。学校や塾、買い物などに出かけることができるのはあたりまえのように思えるが、本当はあたりまえのことではないのかもしれない。現に、日本より犯罪件数の多い諸外国は多々あるはずである。警察の方に守られているということは、税金に助けられているということ。税金は私達の生活を守り、助け、豊かにしてくれている、なくてはならない存在だと思う。

あって当然の税金には、普段ありがたみをあまり感じないが、税金についてを知り、税金がない生活を考えてみて初めて、税金のありがたみを深く感じた。これからも、税金について正しく理解し、大切さを忘れないようにしたい。